

運轉士の操作ふねが漫畫のやうな煙吐いてゆく

岡野宵火

涼かぜきのふできた句のいまいろあせてみえてをる  
秋草、こひびとは風のやうにたよりなかつた  
夕日のなみのなないろをこいでゆく  
日をなくすとくらくなる海昏くてこいでゆく  
ぴかぴかした月をんなのころをおしへてくれない  
をんなは黒いオーバのまま書棚には本が虹のやう  
梅の青葉にふる雨の土藏の前についてる電燈

三好草一

女はおとこの着物縫うてゐる筈伸びてゐる  
古い梨の木が一本ある横の馬小舎です山からの月です  
朝早くて行くに麻ばたけ女のすげがさもゆく  
田の畦には豆まいて豆生へてゐるさて日が照り  
汽車できて畫展のあるこの町の花ざくら咲く日盛り  
郭公、ずつと向ふの山の上を放牧の牛であるとしてよ  
桐の花が咲きかひこ家に居つてかひこの世話する  
さやあんどうがすきとうるやうになつた水邊である  
水に苗が出来て居り黒い雨雲の残つたのが晴れる  
雨止むと青梅のなつたまんまの青い木

吉澤稻市

お寺に世話になつてゐるうちに麥刈がはじまりお寺も麥刈  
温泉場の小さい麥畑も麥の秋白い蝶々  
花もつた人と出逢ひ坂みち、朝日さすそこが病院  
月の涼しく手に觸れて肋のいつぼんいつぼん  
夾竹桃へ海が見えるところのポストがやけてゐる  
すなほな雨あしとなつてゐる石榴の花がくれぎは  
南京豆の花、涼しいうち散歩すませて來た

瀧山重三

をそこなはぬようにといふことも大切であ  
つて)すべて口で發音する通りに書く方が  
いふといふ公式説は、もう一度よく研究  
究してみなくてはならないと、私は思ふ。

一九四六年十二月十九日

○

いま、此の號の校正が出てきて、上の俳  
句欄を見ると、漢字の使ひ方もかなづかい  
も、舊態依然としてゐるし、又「わかちが  
き」といふことも實行されてゐないので、  
少々苦笑のていでもあるが、これは以前に  
出来あがつてゐた原稿がそのまま組まれて  
ゐたので、今さら致し方がなかつたと見え  
る。一體、理論から云へば、こゝですつか  
り新しい用法をもつて統一すべきであるけ  
れども、にわかに一變してしまふと、暗い  
ところからきうにまふしいところへ出た時  
のやうに目がクラ／＼して困るし、フユカ  
イでもあらう。やはりしづかにジョジョと  
目をならして行くのが自然であらう。これ  
からの文字の使ひ方といふことの根本の理  
念さへハッキリと立つて、それをゆるがし  
さへしなればよろしい。とにかく、在來  
長い長い間しなされてきたことから、はな  
れようといふのだから、イキナリひつばが

門の戸暮れてからも風吹く

篠崎早男

餅が草色になつた草の匂ひのほげ暗き白の中  
むれれて生れてむれれてある  
力かしにくる蟻たのみにゆく蟻  
昏れてからの鳥が毎晩今年も栗の花のさくころ  
ひとびとよ生き残りしひとびとよ春よ  
春静かな家ぬち肩ひの話すきいてをる  
そのしづかさよ生きてかへり我家のうめ  
遠い富士があるひとり耕しひとり愉しむ  
けふのしづかな雀と雀そこへてふてふ  
一家十一人雑炊の中菜の花さきてをる  
祭も過ぎて月夜端居してうちわの繪  
栗の花屋根に落ちてゐる汽車から降りた人がすこし  
子供お姉さんと學校のざくろの花の下通る  
明るいうち出る星明るいうち歸り南瓜の花  
こんな日に日の長い紫陽花の靜かさ晩飯  
月のまはりの雲がうごく家のまはりの木祭の太鼓  
雨、なんと白い卵を糶からほり出しては並べる  
山に日のあるうち石の上ありのゆききつきよとなる  
月光あをいあをい小さい小さい蛙が木に  
豆を干しわすれた大粒の雨  
月光ペン、さきぬらしてかいてゆく  
桃のうすべに匂ふほどなりすいかみにくるみ  
帽子をぬぐと日がもう夏である顔になる  
いなづま青くとうもろこし、風が白くとうもろこし、雨

北田千秋子

矢島寒雄

平松星童

すやうなことをすると、かへつて面白くない  
アトクチをのこして、それが又反動的な  
行き方になるおそれもある。要は、ジョッ  
ヨにやることが一ばんいゝとおもふ、  
それから、かく云ふ自分のかくことにし  
ても、一々に「常用漢字」の表を見ての上  
で、これは表にある字か無い字かと檢べて  
から書くことは、そのハンサにたえないか  
ら、自分の書く字で常用漢字やぶりのもの  
も時にはあらう。これは自分で、しぜんに  
直してゆくつもりだから、「君の主義と君の  
實行とちがつてゐるではないか」と云つて  
一々にアゲアシをとつてくれでもこまる。  
それから、も一つ自分の姓の「萩」の字  
も、そのうち改めたいと考へてゐるが、人  
の姓名を國家として正式にどう取りあつか  
うか、そのことがまだきまつてゐないよう  
だから、それがきまるまでに、自分の考もき  
めたいと思つてゐる。雅號といふものは、  
自分の勝手に出来るものだから、これは前  
にも申したやうに、むづかしい號をもつて  
ゐる方は、なるべく早く取りかへていたゞ  
たい。

一九四七年二月五日

# 清 露 抄

萩原 井 泉 水

稻の垂穂道にあふれる晝が夜となり月夜

大越 吾亦紅

作者の力がよくわかる。この力といふのは対象とがつちりと取組んで、これを組み伏せる力だ、又押すべきところを押して、押しきる力だと云つてもよい。稻は豊作、その穂が道端にまで垂れかゝりその穂の一粒一粒も見わけられるやうな明るい月の光り。——これを見て、これを書くことは、さうむづかしいことではない。だが、その穂の一本一本にも感じられる勞作の喜びといふものを、しつかりと自分の心の中に取り入れて、それを自分のことばのリズムにするといふことは、なか／＼に力の要ることだ。この句「道にあふれる」といふ表現がそれをよく云ひきつてゐる。生命があふれてゐる、喜びがあふれてゐる。それは秋のかゞやくばかりの光である。「晝」といふことばが、その光を出してゐる。この光は日が暮れて夜になつても、少しも暗くならないのだ。晝が夜になると同時にそこには夜の光がある。おゝ、何と明るい月夜ではないか。だが——「晝が夜となり月夜」と、こゝまで押しきつて書くことは、誰にも出来るわざではない。大體は

稻の穂道にあふれる夜は夜とて月の明るく

稻の穂道にあふれる夜の月が晝をあざむく

稻の穂道にあふれる月夜が晝のやうな

ぐらゐのところ、投げ出してしまふであらう。そこを、もう一つグイと押すといふことは氣力がなくては出来ないことだが、けつきよくは實力である。「晝が夜となり月夜」といふ風なきこちない言葉はリズムをかたくして、好ましくない場合が多いのだが、此句としては、其がかへつて、面白い調子を出してゐる。それは一句全體のリズムの釣り合から來るので、ぬきさしのならないものになつてゐるからである。要するに言葉が内部的にはりきつてゐる。此の點は味ふ側から云へば、すこし息づまる位な、壓迫をすらおぼえさせられるが、とにかくいかにも力のこもつた句である。

機關車黒くおもたく來て停つていちめん西日の稲田で

池田 詩外樓

此の句も描寫として行きとゞいた句だ。俳句といふものは、日本畫的に餘白を多く残した書き方が普通であるが、此の句は、油繪風に、少しも餘白をのこさずに、すみからすみまでかいたといふ行き方だ。俳句がすべて、かうなるべきだと私は云ふのではない。だがかういふ行き方もあることを知らねばならない。又、こゝまで押しきつて書かうとする意氣をもつてほしいと云ひたい。汽車が目の前とまつてゐる、稲田は夕日であるといふ風景を俳句にするとしたらは大抵は

汽車が稲田に煙はいてゐる夕日の中

夕日は稲田にそこに汽車がとまつてゐる

ぐらゐのところ、手放してしまふだらう。それでは、平凡な句であ

るにとどまる。汽車の中で「機關車」といふものにピントをすゑて大きく印象的に出したところ「黒くおもたく」と、其の色の感じと重量感とを出したところ「来て停つて」と、いままで動いてきたものが今ふつと停つたといふ時間的のうつりを出したところ「いちめん」と、其風景のすみ／＼まで目を通すことに依つて、上の大きく黒くおもたいものを、グロテスクに感じさせることを防いで「西日の稲田で」と、色彩的な背景の中に吸ひこまされたところ、これらの手法は實に好く行きとどいてゐる。「稲田で」の此の「で」もいき／＼としてゐる。

一人別れると二人になる月影の月夜を行く

#### 池原魚眠洞

全體に音調のリズムに乗つてゐて大さう調子が好い。だが調子に乗りすぎてゐるといふ輕薄さは少しもない。三人で歩いてゐて、一人が道の岐れ路で別れてしまふ、それからは二人きりである、この時の二人といふことの一種の親しさ、それを足元の影も又、二人揃つて歩いてゐることに感じた、この感じがふつくり取り上げられてゐる。誰でも、よく感ずること、あまりにありふれた感じである爲に、見捨てられてゐたやうなことを、注意ぶかく取り上げたのである。かういふところにも、此の作者のおうせいなる句作意力が認められる。他の人は捨てておくやうなことを、とにかく自分は拾ひあげて其を物にせずにはおかないといふ意力である。尤も、それには意力だけでは解決しない。それを物にしおほせる技術の力が伴はなくてはならない。此句は、全體のリズムも調子も好いが、下節「月夜をゆく」として、大きく、月夜といふものを樂しんでゐる氣

持を以て全體を包んだところに氣分としての潤ひがある。

富士が秋である田の道へ出る裏のみち

#### 秋山秋紅

富士の句といふものは難しいものだ。月並になり易いからだ。富士は秀峯であり、日本の靈峰でもあるが、それを如何にも靈峰らしく抜ふと、安價な、宿屋の懸軸みたいな感じか、名所繪葉書程度のものになる。と云つて、一個のありふれた山として取扱つたのでは富士でも何でもなくなる。此の差別が難しいのだ。結局、旅行者の見た富士でなく、平生富士に親しんでゐる者の見た富士がいゝ。畫家や寫眞家の見た富士でなくて、俳人らしい目で見た富士がいゝ。さういふ點で、此の作者の此の富士の句はいゝ。「富士が秋である」といふのは、平生、富士を見てゐるものであればこそ、その山の姿の浮き出てゐる空氣の少しの動きにもはつきりと季節を感じるのだ。「田の道へ出る裏のみち」といふのは、日常の生活である。日常の生活の中に其の土地としての富士は入つてゐる。けれども朝から夕まで見てゐる譯ではない、たま／＼裏の道に出た時に、その富士が目にとまる。さうして其の平常の富士を何となくしみ／＼と打ちあほぐ氣持になる、この氣持の中に俳人の目がはたらくのだ。「田の道へ出るうらの道」といふ表現も何氣なくて、自然であつて、注意ぶかい言葉使ひである。

# 明月壇

井泉  
水選

鹽田正吾

中村秋夫

澤木昭二

話すことみんな話して闇のほうたる見に来てゐる  
ぼらのはなさいてゐる夕日がいづまでも塀のうち  
はだやしでせみが鳴く  
木のかげ木のかげとぬくくなる  
草のかげ石のかげ枯れてあるく  
夕べ草摘みほつかり曇つてゐる野にゐる  
ふりだしさるなへいのらくがき  
らうらうといしになきいしにてる  
ほしがこぼれるゆかげんをいふ  
まんげつのいしころ  
かにのあなのさみだれがふる  
はなみづのこぼれさうなひきだけをふいてゐる  
梅の實落ちてゐる學校はひるじまひでかへり  
梨の花や峠の一軒家であめ  
夏らしい姿でかへつて来た娘と机のりんさし  
雀の巢にある卵、日が入つてからも青いそのあたり  
ふるさとは山のふもとの口笛であるく  
夕焼も雲のいろも秋で鮒が釣れますか

# 芝生

井泉水

芝生がある風景は好きである。芝生のあ  
る庭はこのましい。自分の家に芝生があ  
れば申分ない。

アメリカは芝生の好きな國である。公園  
といへば、かならず廣くてうつくしい芝生  
が出来てゐる。金持の庭園には、きれいな  
芝生がつきものである。墓地もまた、芝  
生がしきつめられてゐる。墓地はエヴァ  
グリンといふ名のついでゐるところが多  
い。エヴァグリンとは「いつも緑」とい  
ふ意味である。芝生は春夏秋冬、い  
つも緑の色をかへない。で、あちらの墓地  
は日本のそれのやうに「さびしい」ところ  
は少しもなく、「うつくしい」といふ感じ  
である。墓石も、おほむね大理石で、それ  
が白くてきれいだし、花立には赤や黄の色  
彩の花を盛つてあるから、にぎはしい。こ  
れは日本人と國民性のちがふところであつ  
て、日本人はさびしくあるべきところは、  
さびしいやうにするのが自然であり、そこ  
に「おちつき」を見出すのだが、あちらで

月が出て三日の月木蓮には匂ひがあるのかしら  
散るや散るや流れあれば

松岡蒼見

月にくす雲がかかつてるきりで病室平穩  
かもめよ白い麻の洋服で風は川から来る  
梅雨晴れの開閉橋があがつてゐる進駐軍の水兵さん

青應香

丹波山並の青く遠く道は松の花の時  
遠い蛙といひ夏鶯といひ峠には日のまだ高く

なにかものうし六月の白い鬼はかごの中  
草の實なんど六月の海のしづかな

櫻田輝郎

しがれふるとあがると紅葉した葉の流れてゆく疎水  
雞が夕やけを見てゐるはたらいた牛は歸つてくる  
蟻が登る本の窓の夏が影してゐる

住みつけばきよらかなこころいなかの朝掃く  
さらさらつゆがちるあさのささげのつるにささげがたくさん

印南健治

枯木ばかりの門があるとそれに二三枚配達してゆく日ざしで  
河原月が出たので舟で焚く火で  
青海、西風の白浪立つ日の鯛を干す

西日は窓の青桐に浴衣でオルガンひいてゐる  
いなづま、うすものに乳房はつきりと娘でゐる

小川環

いひあらそつたあとのさびしさはかごのきりぎりす  
田がある畑がある日本の麥の色である歸る

其外のごとはみんな夢になつて手に彈丸のあとがある  
少し熱があるので卵の白さようちの鶏の

青い窓に石をなげると石がおちてくる  
昔たこあげた頃の風があるたこあげてゐる

は、さびしいところはせめてにぎやかに作  
つて、心をなくさめようとすのだ。これ  
はどちらがいゝ、と決定するわけにも行く  
まい。芝生そのものゝ好みについても、國  
民的に大きな違ひがある。あちらでは、芝  
生の美しさは、グリーンの美しさに限ること  
にしてある。日本では、芝生が冬になつ  
て枯れて、きいろくなつたのも悪いものと  
はしない。で、アメリカの觀光客が宮城前  
の芝生がきいろく枯れてゐるのを見て、何  
たることだとおどろくさうだが、私たちは  
そのミカン色もまた美しいものと見る。こ  
れも、どつちがほんとうだと、決定するわ  
けには行くまい。私は、みどりの芝生も、  
きいろい芝生も、いづれとも共に好きで  
ある。

アメリカには住宅都市といふものがある。たとへば、パセドナのやうな、一そこ  
では、住宅の地面は何坪以上ときめてあ  
る、小さな家は建てさせない。又、住宅街  
には商店を作らせない、で、いづれもそ  
うに大きな邸宅ばかりがそろつてゐる。  
道路は廣くとつて、並木が出来てゐる。邸  
宅はその道路に面した方がかならず庭園で  
あつて、それが又かならず芝生のみどりで

藥局の四角な窓明りが青桐ぬらしてゐる雨  
思ひ出したやうに芒が五六本牛車が通る  
なんでも食べるものは高い日ざかりの舗道をあ  
るとんぼとんぼ子供が子供をとうせんぼしてゐる  
ことしわれに妻ありて豆柿の實の熟れ  
朝から市場が立つて霜のとけてくる晴間  
ひとり眠つてしまつた子の枕もとみちのくこけし  
春の日松林の中に小さい家があつてそれから道  
岩、苔、つた、ふ、清、水、の、音、も、な、く  
夜は氷かく音がよしらずにちやうちん  
星があすの日程

石井洋音

増田折莖子

内藤吹星子

佐藤龍

永田杏平

中西國友

福本逸子

光線葉ごしにきて栗のはなにあまくさみしくゆれ  
行けばあへよう人をも訪ねず今年のうちは  
かくれて住むやうなぐみの花こぼるる  
野の花を壺に墨すつて書くことがある  
傘さして夏夕べ兎に食べさしてゐる  
日がさして山茶花日かげつて山茶花、病んでゐる  
かげが日なたを追つかけて日のない草が風ふく秋  
青葉がうなづいたり揺れたりそして降りだしてゐる  
ひなの五六羽草に放してある客に來てゐる  
栗のはなちる納屋のすみ牛が顔出して  
星ばかり美しい祭のたいこがきこへてくる  
アカシヤの花はこぼるる看護婦さんは唄うてゆく  
木の年輪が夕日にはつきりと其邊落葉  
月夜の好い路となる月が黒雲を出て

ある。日本では、草は冬になると枯れる  
が、アメリカは桑港から南の方では、又、  
ハワイなどでは、夏の日光の強さのために  
草が枯れる。で、芝生をからさないように  
するには、一日中ときんく水をかけること  
を必要とする。それには、芝生の中に水道  
のほそい鉛管を置きならべる、その鉛管に  
は小さい穴があいてゐる。スイッチを入  
れると、その穴から噴水がきりのやうに四  
方にほとばしつて芝生をうるほす、シヤワ  
アを反對にすえたやうなもので、これをス  
プリンクラアと呼んでゐる。このスプリン  
クラアが一せいに水をふいてゐる風景は、  
松井源水の手品のやうでなか／＼美しい。  
かうした設備のほかに、人手ももちろん澤  
山いる。刈り込んだり、雑草をとつたりす  
るのもずいぶん手がかかる。だから、小さ  
な金持では、芝生をもつことは出来ない  
云はれてゐる。

アメリカ人にとつて、芝生といふもの  
は、生活の一つの「あこがれ」であつて、  
しかも誰にももちえないものであるから  
公園といふものでそれを大衆的に満足しよ  
うとする。だから、公園には、大きくて、  
誰にも氣持よくたのしめるやうな芝生が出

道祖神に一本の水仙が匂ふてゐて枯草の中  
夜に入る月が墨繪のやうな川に川音  
海なり山にある墓にきてゐる  
笑ふと白い齒の見えるたのしい月夜でした(三男死す)  
草に晴れ間の夕日ありその草をとる  
かぼちやの花大口あいて人が笑つてゐる  
トマトが赤くなり今日の目おちる  
窓から山が青い製圖する白いブラウスの生徒さん  
青田に白さが飛び立つ鎌倉は乗りかへの大船あたり  
ねむの葉の風ミシンが休むとお晝らしく  
汽車の出たあと夏の日が驛長さんと二人  
世の中のこと人心のこと今夜は梅雨に月がある  
雨がほしい雨雲それてしまつたごまの花白く  
日に日に水田になるみちのあつくなる日のてふてふ  
そとははるさめのはるれば講堂の聴衆  
しげりしものにときなきあさのみちが一本みち  
どちらむいても青田ばかりのゆだちのなかふみきり  
朝の月も青田の中の蓮池の蓮のはな  
墓が花さく花を供へる  
水田の雲が昏れてゐる祭りばやしのけいこ  
幼い色で繪になつてゐるきりぎりしが二本  
ほしよもぎの匂ひが夏の日も暮れたくりや  
張物板と日なたにしてゐなさはこべ春になつてゐる  
ここのの蕪積はここの型に菜の花れんげ  
くれるころはやんでゐるまめづる

大山冬石

鍋島次男

關根不佐子

池邊象外子

山田こころ

内藤英夫

竹内孤明

山根志乃竹

來てゐる。あちらの芝生は、芝そのものゝ種類もちがうのかもしれないが、草の葉が大さうやはらかだ。その上にゴロリと寝ころぶと、上等のじゅうたんよりもやはらかく、羽根ぶとんの上に寝たやうに氣持がいゝ。靴でふんであるくにも、ふつくりとして、いかにも歩くといふことの感覺をたのしめるといふ氣がする。芝生の感覺といふものは、つまり一つの觸覺であつて、目で見てうつくしいといふ視覺だけのものではない。で、日本の公園のやうにたま／＼芝生があると、これにさくをめぐらして「芝生に立入るべからず」と制札がしてあるのは、何のために芝生を作つてあるのだから、ナンセンスであらう。——もつとも日本人は下駄といふものをはいてゐるところにツミがあるのだが——芝生をたゞ見るものとする日本人と、芝生を觸れるものとするあちらの人と、これは國民性の相違ではない、ハキモノの相違からきたところの習慣の相違である。芝生は何としても、そこに腰をおろしたり、ゴロリと寝ころんだり、殊にこれから日南のうれしい季節には、日本流にひなたぼっこをするところに、芝生のたのしさがあると、私は思ふ。かうした



降りつめてあぢさる降りやんで暮れてゆく  
山川白朝

少年馬に乗つて山のさくらばな  
そらまめ花つけその花眼をもち  
陶土をこね陶土をこね茂つてゆく  
加藤白水境

岩をはつなつの流れをふまへて釣る  
月夜のほたるが草にもゐて、そこらあるいてきた  
麥秋が曇り夕べ菜種がら焼いてゐる  
水野田々詩

遮断機が上ると遠くの山の色が雨はれた秋  
山百合香にむせるほどの事務机につく  
木から雨の滴る豆の木豆のはな  
水田潤

木々の蟬空の鳥山は中腹まで家のある  
すつかり秋になつて先生も掃いてゐる夕べ  
霧からあぢさるの花起きてこれを観る  
本山越永

山ゆりの香が強い朝の新聞を開く  
豆がよいれた一冊の本  
白い猫とこうもりがさ持つた子供と梅雨  
岡本流一

雪國のひるの雪ふる電車がそこから出る  
疲れたやうな夕べは夫婦だけの風のある唐黍の穂  
てふてふけふは母の墓にきてゐる  
日野素木

月があかるい裏の畑はたけ中の桃の木  
はなれれて一軒もおまつり  
種子やの種子も日がのびる日ざしがのうれん  
鈴木單衣女

雲がかけてゆく雨足もかけてゆくやねの石  
朝ひらくばかりの白い花二三輪政札が出る  
吊橋もどる時の山の日がだいぶん伸びて來てゐる  
高橋政二

意味では、日本風にきいろく枯れた芝生といふものが、特にいゝ味のあるものだ。みどりの芝生は草としてなま／＼しく、露つぽい感じであるが、黄いろく枯れきつた芝生は、らくだの毛のおりものやうなぬく／＼とした暖い感じであつて、其上にひなたぼつこする楽しさは何ともいへない。

私が數年前、この鎌倉に移るために家をさがした時、部屋敷は少かつたけれども、庭に芝生のある家であることを好ましく思つて、その家にきめた。(それが今居る家である)。ところが、當時、戦争がはげしくなつて、どの家でも防空ごうを作ることになつた、私は、家の周圍の地勢から、その必要はないと考へた(せつかくの芝生を掘りおこすこともおしかつた)けれども、隣組の決議だと云つて、とう／＼ムザンにも、芝生の一部は掘りかへされてしまつた。その次は食糧問題だつた。どの家でも土地の許すかぎり、いもや、菜つばを作らなければならぬことになつた。この時も、私は、うちの芝生にミレンがあつたのだが、家族みんなの口の問題であつてみれば、自分ひとりの好みにも引かれてはあられない。つひに、芝生の大部分はいもぼたけに

きびの葉に三日月 戦さ話も高笑ひになる  
 たばねてかけた蕎麥の赤いのも冬になつた空  
 一枚一枚水田のあめふるこの道あるく  
 ふる音流るる音のあめはだしでゆく  
 どこまでも水田の傘さしてゆく  
 夏は月夜をお馬が歸る  
 菫子は静かに切り昏れてゆくはたけ  
 遠山雪のあつて風のある麥畑の徑ゆく  
 大寒といふてこの温さくのぎ林にひるつかつてある  
 夕べはトマトが澤山花つけたといふ娘と病人  
 病人見るのが裏ばかりのはたけの青い梅雨の晴間  
 いくさがすんでゐる戦闘機の爆音がふくべの花  
 山からの雨が田植のみのしづく  
 菫子の店出して夏の朝足もとへこぼれ  
 海にはかはらぬ沈没船の姿梅雨に入る  
 雨もよりの月が雲を出てからの話です  
 ほんに春はあたたかな水に生れてゐる  
 海がだまつてしまつた日盛り  
 やきもの出して青葉の光こぼるる  
 梅雨晴れ焼跡からも蔓が伸びる  
 負けたことはどうにもならない梅雨が漏つてきた  
 浪音眞下に春はだんだん島出來だした  
 笹を風垣として萌ださせてゐる  
 病院の窓は空ばかりの、空へ星が出るまで  
 消せば夏の月のほの白いベッドにしてゐる

堀切春扇

木村樟樹

高久地然

東草二郎

下田麥

平賀星光

栗田千可志

門藤康生

松尾秋甫

井澤照水

平田定市郎

なつてしまつたのである。そうして現在に  
 及んでゐる。私の家ばかりではない。全國  
 の芝生をもつてゐる家は皆さうだつたであ  
 らう。日本における芝生のごうか版である  
 各地のゴルフ場のごときは第一に、いもば  
 たけか、麥ばたけになつてしまつたのであ  
 る。

戦争はすんでも、食糧事情はいぜんとし  
 てひつぱくしてゐる。いや、いくぶんづゝ  
 かは好い方にてんじてゐるらしい。芝生  
 も、そろ／＼とだん／＼に復活してくるこ  
 とかとおもふ『明るい日本はまづつくし  
 い芝生から……』と云つては、云ひすぎか  
 もしれないが、諸方に芝生の芝がもえだす  
 時こそ、ほんとうに日本は昔のやうな美し  
 さをとりかへす時であらう。

鎌倉だより 井泉水

終戦後、全くあたらしく編輯し直される  
 こととなつた國民學校の教科書に自由律俳  
 句の採りあげられたことは、當然とは云ひ  
 ながら、欣快のことである。その句は一般  
 の國民學校の生徒から生徒の作品を募集し

若葉の隙から飛びつく雨が硝子戸に、白い朝  
 白い雲あとからあとから湧いて桐の花  
 納屋の戸は閉めてあつて月に今年の竹が一本  
 汗のシャツはぬがせてもらつてお久しぶりです  
 熟麥のほひも斜面なる畠のそよかせ夕べ  
 風が来る雨が来る街路樹に来る道に来る  
 わんだん町の灯むかしになる子供うたつてある  
 朝の打水もすずしく通り花屋盆花賣つてある  
 湯いて白い雲浮んで白い雲土用に入る  
 林眞夏の日ざし日かげ話はずんで少女達くぐん歩いてゆく  
 パラツタ家並の遠くには櫻咲き初めし見ゆ  
 朝はすず風豌豆の手に竹をさして  
 山は萌えいろのわらびもさかりごろの眺むる目もよろし  
 もう夏らしくくみみづなく夜の月には雲  
 女の子の子と傘さしてゆくの梅雨  
 苗田のすみに苗がうかしてあつて遠山あめにする  
 傘のいるほどでもない雨のふきのとう  
 草餅の草つんである川ぶしんの晝の煙たたしてある  
 夕は風がある程のけし坊主  
 足洗ふ豊かな水である  
 梅雨くらくふりしぼらくは明るさとなりて降る  
 親子三人のたのしさは夏の夜の井戸のしたたる水おと  
 熟れて落ちたるやこれのむくろじゆ笛にしてふく  
 夜の木が青く明けかかるとひよこびよびよ  
 憩うて枯草のこうして話すことのすみれよ

渡邊伊佐男

仁平青蛾城

森田和夫

小澤養心王

中村伊知郎

渡邊天仙花

松井柳城

梅木成敏

古川紅雲

渡邊無患子

都山海人

吉村しをり

西岡葉子

たもので、選者は文部省の圖書編輯官であるが、選ばれたものは(毎日新聞による)

佐藤一允

すずめちゆんちゆんないて秋の雨  
 月がまるくてどこのうちにもすよきたて  
 である

えんとつがせいびしてある雨方からは  
 りがねがひいてある

もみちがまつかで山いもをほつてある人  
 が三三人

雨がふる風がふく櫻の木がぬれてある

此の少年は社友、佐藤專子のお子さんで  
 數年前までは「明月壇」にときどき出して  
 ゐたから、諸君にきおくもあらう。第十八  
 句集には――

もう日曜がをはつてしまつたからすもか  
 へる

此句などは、殊にこどもらしい氣持がよ  
 く出であるばかりが、句としても好い句で  
 ある。

○

在來、國民學校の教科書には、芭蕉や一  
 茶の句が載つてゐて、俳句といふものを見  
 童は、説明をきいてゐるが、それは昔の俳  
 句だし、先生も、定型俳句以外に俳句はな

夕は茄子の花ラヂオがカムカムと歌つてゐる  
 静かな里の暮色は麥秋となつてゐて  
 焼場へ通る道も青桐花つけてゐる  
 月がふうりん鳴らして雲が出てくる  
 かあつとはれて白い雲、白い枕してゐる  
 まだ降つてゐる港の灯はもう明けてゐる  
 青葉、天道蟲は手の上に見てゐる  
 宿をいただいて屋根には南瓜のはつてゐる  
 一望焼野原暑いポストが口あいてゐる  
 此處にも春が来てゐて目隠し鬼の先生です  
 米兵と子供と櫻が満開  
 梅雨も上らうちよつぱり青葉松葉ぼたん貰うて来た  
 白い餅ささもちにする笹は山からとつてきた  
 蜘蛛が巣をかけるのを夕日を釣りにでもゆかうか  
 子ども網もつて石の上、眞夏の水がまぶしい  
 雨雲きれて山の上のアシテナ一本  
 いもの花さく農休にしてけふ雨  
 庭の南瓜はわせていい月夜にしてゐる  
 今日海が静かな海の遠くの山がもう春である  
 波、岬とつばなの鹽小舎の煙がふつとんでゆく  
 朝の日ざし貧しい庭の黄菊一二輪はさみで切る  
 冬になつた空を高壓線が通る  
 あれは貝採舟の雨ためてやんでゐるゆふがた  
 地べたに落ちてほうたるあるく

佐藤吟雨

加藤源喜

平賀夕星

古賀サダエ

犬飼啓三

桐井章彦

小山清

蒔田豊

酒井健之

吉川群城

三井不二雄

廣田不知火

いと考へてゐる人ばかりだから、時には兒童に句を作らせたりする先生も五七五のほかはやらせない。時たま、その兒童の父兄が自由律を教へて見ても、先生に見せるとそれは俳句でないと云はれるから、それでお仕舞になつてしまふ。さうした點は、今後、是正されるだらう。なにしろ、教科書に「自由律俳句」として掲載されてゐるのだから……かうした意味で、在來、道路をふさげてゐた大きな石が取りのぞかれたやうな、朗かな氣持がする。

○

新聞で讀まれた方もあらうが、こんど日本の政府の仕事として、俳句を翻譯してひろく世界に紹介することとなつた。委しく云ふと、日本學術振興會といふものが以前からあつて、日本の學術を世界的の標準に高めるといふことに力をそそいでゐるのでその一部として、日本の古典の解釋及び翻譯に従事してゐた。「萬葉集」と「謡曲」とはすでに完成して、まづ、りつばな業績をあげたと云つていゝ。で、今度は俳句が取り上げられたのだ。なにしろ、古來、幾千萬だか、數の知られてゐない俳句全體のうちから、これぞと思ふ句をえらみあげて

青桐が涼しい三階で話す  
 夕顔の花白くさきこんや月夜とならう  
 いまさら公報を手にした心、菊の手入をする  
 ともしびみづうみくれてゆく  
 戦さのヒマが今年も實になつてゐるのも暑い  
 まだ降りたらないものの涼風が芋畑  
 栗の花の白さふさふさ雨やんでゐる  
 落ちた椿は輪にする子供のゐて夕べの誦經  
 はきよせて焚いてある寺のしだれざくら  
 ちらちら雪が麥の青い芽に障子あけとく  
 窓の木の外の白い霧で遠い霧笛である  
 お僧衣をぬいでこられて青葉に風がある  
 ラジオは野球放送、燕はすういと通る  
 窓から蜘蛛が下りて来る朝曇り  
 朝は日かげの、裏は青い柿ついてゐて暑くならうといふ  
 螢ひかるしづかな息をしてゐる  
 朝のうちは涼しい膳のたまごにさじ  
 山のやうな麥のくるま日が落ちてゐる  
 蓬を摘んで蓬のこぼれさうな籠を  
 机に本が一冊夏のやまもない  
 潮風電車に來る橋も渡つて行く  
 げんのしようこ子供にものませてゐて茄子の花に雨  
 朝露はしごを昇る肩の上のすももが  
 生きてかへつて父のそばでめしくうてゐて梅の實  
 うれ麥うれつづいてゐる刈りすすみゆく

柳澤白草  
 伊藤貞夫  
 井倉松雨  
 古曾志惠洪  
 松下千秋  
 皆川青鈴子  
 鎌田一相  
 大友疎風  
 藤本ふき子  
 細田敏子  
 齋藤修一郎  
 飯田三茶  
 小林昶夫  
 藤仲巴菴  
 中村威  
 渡邊旅人  
 鶴淵螢光  
 鶴岡邦彦  
 中野弘雄  
 藤井善三  
 大矢雄一郎  
 東信太郎  
 鈴木充  
 竹久清信  
 小橋康則

それを翻譯したり註釋をつけたりしようといふ仕事だから、ナミタイテイのことではない。まづ三年間の仕事とする。委員制度であつて、小委員會で個々の具體的の事をしあげて、其を大委員會で決定するといふやり方だから、やゝこしいことだが、仕事の建前が個人的の仕事ではない、國家的の仕事だといふ點からすれば、こうするより致し方ない。その委員は主として、大學方面の學者であつて、文化評論家といふやうな人々が之に加つて凡て二十名である。私も亦、その委員になつてゐるが、俳人としては、私一人であるから、私の責任も重いことを感じてゐる。

十二月十七日に、第一回の委員會が上野の帝國學士院で開かれた。此の席上で、俳句はいつの時代からいつの時代までとするか、全體何句選出するか、連句は取り上げるかどうか、序論は誰が執筆するか、等の問題を論議した。――芭蕉からはじめて子規まで、全體にておほよそ千句といふことにきまつた。連句のことは、だいぶ議論があつたが、私は取り上げるべきことを主張し、谷川徹三氏がまた之を力説したので、遂に入れることになつた。で、さつそく、

青、空、白、い、雲、の、出、て、る、る、麥、刈、る  
 南瓜がむせるほどひろがつて錢湯に行く  
 土に汗がおちれば光るやうなとかげ  
 春の海からボンボン船笛ふいてくれば寄つてゆく  
 思ひ出もすずしく白桃の白さにもあなたのこと  
 まあ夕やけの美しいこと畠に水やりませう  
 掃いて障子あけておいて春  
 此頃日がさすと雪垂れにして植木屋さんそこを通る  
 障子あけて寒くない夕べのよい便りがありさうな  
 日南は道がぬかるんで墓所の多草  
 音は落ちのこつた枯葉の音か  
 赤い柿が梢に二つあつてつぎぼりの障子  
 犬松伐られる音のこだまするのも秋の白い雲  
 二つ三つ色づくトマトへそへ木したりけふ家にある  
 ラデオはつきり聞えて星空の水田の一軒  
 山は青いままに松の木に鳴くものも日の暮れ  
 朝風床の間の百合ひらからうとする  
 夕日がびわの木のびわにはだかをふきます  
 一本の紫苑が秋の線をもち子供三輪車  
 山門出れば山なみ夕日映えて稻刈り日和  
 時雨れて言問橋のひつそり  
 二人してゆきまんじゆしやげ別れてからもまんじゆしやげ  
 からも切干して焼跡日和つづきのとなりの奥きん  
 凍て星の中の火星が燃ゆるよ  
 爺さん影法師と漁網つくろつてゐる小春

長谷川勝好  
 梁瀬阿羅與  
 中村敏喜  
 森景諫郎  
 平田すみ子  
 酒井のぶえ  
 中原紫保子  
 並木縁朗  
 積木昂風  
 齋藤第九人  
 前田陸夫  
 橋本光男  
 杉浦經子  
 長山林二  
 杉原明雄  
 片桐光成  
 佐藤倉吉  
 杉木一權  
 辻村追鳥子  
 入江功一  
 望月皓  
 田中敬三  
 廣田不知火  
 白石黙忍冬  
 吉原三峽水

第一に翻譯すべき俳句及び連句の選出といふことに取りかゝることとした。

一月十日に、實際の仕事をする小委員會を開いた。小委員は、能勢朝次、麻生磯次、折口信夫、久松潜一、額原退藏の五氏と私とも六名である。取捨選擇の上でなかなか議論も出た。今後も議論の多いこととおもふが私としても今まで接觸してゐたのとちがう方面の學者たちと、ひざをまじへて、こゝにいふ問題を研討することは、大それた興味ふかいことと思つてゐる。いや、私的な興味などは第二である。國家的の仕事としてりつばなものを作りあげる爲に、皆が協力するといふ意味で、私の全力をそそぎたいといふ熱意こそ、第一である。そうして此の意味に於ての熱意は、他の委員の人々の後におちないといふだけの自信はもつてゐる。

○「讀書くらぶ」のことを發表してからこれに加入される方が多くなつたことは、せつかく之を作つたかひのあることゝ喜んでゐる。

○「層雲第十九句集」は、大てい諸君の御手元にとどいたらうと思ふが、まだ入手さ

白ひく音

伊東俊二

一年ぶりでやはり暑くて道に豆が干してある  
白ひく音の月夜の山  
(但馬竹田にて詩外  
樓行露氏と、四句)

三人に三つの盃きうりもみ涼風無盡藏  
むしるに干した三いろの豆お日さま  
めがねはづした顔を妻とみて朝の青葉  
(京にて三句)

縁の石臼の母とこれもむつきにしてしまふ妻と、涼しく  
妻の家にきても暑くてちやぶだいの私の簪  
將軍土に親しむといつた笑顔で夕日  
(神戸  
滴々亭にて九句)

夕方家内中で出ているいろいろの葉つばの水やる  
電車の音の向ひ側のはたけからのけふもトマト五六個  
ふくべのやうな形のかぼちやも暑くて丹誠する  
笠素と隣酸とあふれる太陽とてふてふ  
もいで柿のやうなトマトとまだ小學生である子と  
卵うませたり其邊遊ばせたりする白鷄があるのもすずしい  
茄子の葉もトマトの葉も暑かつた日の夕べ灌水  
いつきても滴々の先生の字の冬あたたくけふ涼しい  
道が町が青田になると立山見ゆる流れてゐる  
わけ田のおくて田の色や水の音や君の村に入る  
道に干した草の匂ひが夕日になつておぼあさん  
麻の一群ら青い萩もひとむらの庭のあるじである君  
越中ふんどしことが越中であることも風呂を出てすずしい  
(富山  
良太郎氏訪問八句)

山の谷の雪が見える月夜になれば青田五位鷲  
朝の木槿掃いてゐる子讀んでゐる子など三人  
立山に雪の見ゆる青田の道朝早く行く

れない方は御申越を願ひたい。「層雲第十  
八句集」も「層雲第二十句集」も二月中に  
出来る豫定である。

○マンツ書林から「芭蕉隨想」が出た。芭  
蕉に關するエッセイをあつめたものであ  
る。寺本書房から「標註芭蕉選集」が出  
た。これは芭蕉の句と文とをあつめて頭註  
を加へたもの、誰の机邊にも一冊はなくて  
ならぬものとおもふ。

○「讀書くらぶ」に加入してゐる方でも、  
出來た本を皆送つたらば、不用の物もあら  
うから、註文を待つて送本する。社では、  
此の事務の爲に、一人が別にかゝつてゐる  
から、事務の上でのじうたいは無いとおも  
ふ。で、讀書くらぶ用のごとは層雲の會費  
とは別に申越を願ひたい。

社中より

・井先生は十一月に關西に旅されてから、  
十二月も正月も龍洞の書齋に籠つてをられ  
た。お身體に障りはなくお元氣なのだが、  
此頃の汽車の状態ではどうにも致し方がな  
い。暫くは鎌倉で春暖をお待ちになる筈で  
ある。先生の身邊消息は冊子「龍」に載せて

## 角の館町

大越吾亦紅

林に小鳥飛び入り夕べ子を家に呼び入れ  
日のあるうち障子のきりばりそこへおとないてくる  
ひとり稻刈り稻投げをんなのひとにて晴れ  
秋空建物四角い窓のむすめさん見ゆる  
教員室の窓秋の日和の夕べにつづく  
鏡のなかの笥の水おちるとこやの椅子  
運動會のある野につづく野をあるく  
ふところ書春の日野へでてあるく  
仕事に暇あつてお醫者芍薬の芽の赤い  
種つけに馬ひいてゆく言葉かけてゆく  
さくらさくらとさくら見て来て家のさくら  
よい湯の風呂から夜の梅しろし  
わがのぼる春の山わがまへのぼるひとひとり  
かぶら五つ六つ無心の一筆したためる  
袖うらもみの女つつまし戦話を聞いてをる  
學校から大根背負うて退けてでるけふ  
漆のやうな闇を窓うちわ使うていへのうち  
このや蠶が四眠にはいり御主人おいへのひと  
ここに僅かの麥の秋朝でて夕べにかへる  
みちにさくら門に枝垂櫻の雨の角の館まち  
車窓から軒した雨やどりする人のさま見ゆ  
鳥海、女山駒形男山へだたりて六月の空  
雨漏りけに音して夜のわが家わがねる

ある。龍の事はお申越あればお報せする。  
・僕は旅行ばかりしてゐる。この冬は多く  
關西の空にゐた。層雲が、今後も堅實な歩  
みを續ける爲には……と先生の御意向を伺  
つては窓の破けた満員列車を乗繼いで方々  
へ行つた。此頃旅は苦勞だが、行く先に同  
人の温い心があつて、さうして句會がある  
から楽しい。さうするうちに京都に木衣樓  
さんの世話で、菊の會が出来たし、荻さん  
の會社でも一つの句會が出来た。大阪で牧  
句人さんが冬眠から覺めて、港の會を催し  
た。神戸の楠の會も復活して、滴々亭で毎  
第二日曜の夜催すことになつた。名古屋の  
城の會も復活する。  
・これらの句會のことや會員諸氏の消息は  
層雲會報に載せることにする。層雲にはペ  
ージがないのだ。A會員に配るべき其會報  
は四月頃から續いて出してゆく。  
・中塚一碧樓氏が舊臘急逝された。哀悼に  
堪えない。一月十九日、梅林寺で告別式が  
あつた、秋紅蓼さんが参列された。僕は其  
日京都にゐた。京都で追悼の句會を催した。  
海紅の人、層雲の人が五十人程、壁に故人  
の揮毫の軸を懸け連ね、故人を語り、しめ  
やかな會だつた。

(俊二)



層雲社への御照會はすべて返信料添付のこと

## 層雲會内規

- ◎層雲會は井泉水先生を中心として自由律俳句を研究し會員相互の親睦をはかる爲のものです。
- ◎本會の會員には、毎月雑誌「層雲」を配布し、又随時「層雲會報」を配布します。又随時に俳句會、吟行會研究會を開きます。
- ◎本會は會員五名以上あるところに地方支部を置きます支部は其地方に層雲道の普及をはかられたく、本部としては出来るだけの便宜を(例へば、講演會に講師を出張せしめる如き)をはかります。
- ◎本會の會員を分ちて、A會員、B會員とします。B會員は月額四圓、A會員は月額六圓以上を拂込むものです。
- ◎層雲への投稿は、B會員は毎月十五句迄、A會員は三十句迄送句出來ます。A會員の投稿は井泉水先生の批點を受け雑誌に登載する前に返稿します。又、A會員は一年一回「層雲手帳」の配布をうけます。
- ◎本會は新日本文化運動として、「自然、自由、自己一體」を綱領とする層雲道を弘布普及したく、此の運動資金として有志よりの後援を期待してをります。

## 目次

文章	無畏……………1	代田青田…井泉水…3
	動作にリズムを持つて……………2	白ひく音…俊二…30
	常用漢字其他……………4	角の館町…吾亦紅…31
	清露抄……………18	麗日壇…井泉水選…4
	芝生……………20	明日壇…井泉水選…18
	鎌倉だより……………25	(表紙 鈴木信太郎)
	社中より……………31	

## 投稿略規

- ・投稿は誰でも自由
- ・俳句は一人一月一稿
- ・句數は一般は十句迄
- ・句稿の添削を望む方は別項内規に依る
- ・用紙は半紙二ツ切大のも
- ・一枚に五句迄、楷書清記、二枚以上は左上カドを綴る
- ・締切は毎月十五日
- ・投稿先 層雲社編輯部

# 有隣亭蔵書

## 層雲

第四〇三・三號  
 昭和二十二年二月二十五日 印刷  
 昭和二十二年三月一日 發行

編輯兼發行人 萩原藤吉  
 印刷人 森藤里見  
 印刷所 東京印刷株式會社  
 發行所 層雲社  
 神奈川縣大磯町山之内一五三四  
 振替東京八〇二三番  
 東京都神田區淡路町三ノ九  
 配給元 日本出版配給株式會社  
 定價金五圓

荻原井泉水著近刊書 ○印は最新刊

層雲第十八句集	限定會員本	拾八圓	六〇
層雲第十九句集	限定會員本	拾八圓	六〇
大泉叢書春蘇る	頒價	四圓	三〇
大泉叢書青葉若葉	頒價	拾圓	六〇
評論集芭蕉隨想	頒價	拾二圓	六〇
日本叢書向井去來	頒價	二圓	三〇
隨筆集私の綴り方	會員本	拾三圓	六〇
句集金砂子	會員本	拾圓	六〇
句集千里行	會員本	拾五圓	六〇
隨筆集京洛春秋	會員本	拾六圓	六〇
標註芭蕉選集	會員本	拾八圓	六〇

讀書くらぶ

神奈川県大船町山之内、一五三四  
振替東京三〇〇一七番、大泉園内

◎井泉水先生の近刊著書を優先的に入手する爲に「層雲讀書くらぶ」があります。

◎讀書くらぶ會員は隨時「くらぶ」宛に購買上の金を拂込んでおき、其の金の範圍にて優先的に發行圖書の送付を受けるのです。

◎拂込は月を限らず、御都合よき時に隨時にて結構、但し一回十圓以上のこと。

昭和二十一年五月二十一日  
考本考筆  
（一）